

白氏文集 四十 琵琶行 (四)

加藤淳平

北の黄河溪谷より發したる文化的中心の、後代に南の長江岸に移れるが、漢土の歴史なり。唐代は、皇都は西都長安、東都洛陽、何れも黄河沿岸なれば、長江岸は未だ中央より隔たりたる僻遠の地なりき。白樂天の如き、華の都より、斯かる僻遠の地に左遷せられ來たる人、豈「天涯淪落の人」ならざらんや。

琵琶行 (四)

琵琶行 (四)

鈿頭雲篋擊節碎
血色羅裙翻酒汗

鈿頭の雲篋 節を撃ちて碎け
血色の羅裙 酒を翻へして汗が

今年歡笑復明年

今年の歡笑 復た明年

秋月春風等閑度

秋月 春風 等閑に度る

弟走從軍阿姨死

弟は走りて軍に従ひ 阿姨は死す

暮去朝來顏色故

暮去ゆふへ 朝來あした たり 顏色いろど 故ぬ

門前冷落鞍馬稀

門前は冷落して 鞍馬稀れに

老大嫁作商人婦

老大嫁して 商人の婦つまとなる

商人重利輕別離

商人は利を重んじ 別離を輕んず

前月浮梁買茶去

前月 浮梁に 茶を買ひに去る

去來江口守空船

去りて來このかた 江口に 空船を守る

遠船月明江水寒

船を遠めくる月は明るく 江水寒し

夜深忽夢少年事

夜深ふくれば 忽ち夢む 少年の事

夢啼粧淚紅闌干

夢に啼けば 粧淚あか 紅く 闌干らんかん たりと

我聞琵琶已歎息

我琵琶を聞きて 已に歎息す

又聞此語重唧唧

又此の語を聞きて 重ねて唧唧せきせき

同是天涯淪落人

同じく是 天涯淪落の人

相逢何必曾相識

相逢ふ 何ぞ必ずしも 曾ての相識なるべき

(大意) (女の言葉の續き) 琵琶を弾く螺鈿の飾りのばちは、長年拍子を弾じて居るうちに碎け、血の薄絹のスカートは、酒をひっくりかへして汚れてしまひました。そんなことは氣にならないまま、今年、又明年と笑ひ明かして居りました。さうしてあるうちにいつの間にか、秋の月の夜々も春のそよ風の日々も過ぎ、弟は家を出て兵隊になり、養母は亡くなり、一夜が明け、又朝が來てあるうちに、容色は衰えて參ります。曾ては人が集まった家の門前は閑散として、鞍を置いた馬が訪れて來ることは稀になり、年を取った私は嫁して商人の妻となりました。商人は儲けには熱心でも、妻と別れることは氣にかけません。私をここに放置して、先月浮梁に茶を買ひに出掛けて行きました。夫が去つて以來、私はこの長江のほとりで、一人きりで船を守つて居ります。船とその周辺を照らす月は明るく、長江の水は冷たうございます。夜が更けるといつも夢見るのは、若いころのこと。夢の中で泣けば、化粧をした顔に、紅色の涙がしとどに流れます」。私(白樂天)は女の奏でる琵琶の音に已に歎息したが、また

この言葉を聞いて、唧唧たる思ひがもう一度迫つて來た。この女も私も共に落ちぶれて、都から遠く離れた僻遠の地に流されて來た者である。ここで逢つたからには、必ずしも昔知つてゐた者同士でなくともよいではないか。

(平成三十一年四月二日受附)